PTA 東海北陸ブロック研究大会愛知大会研究発表原稿

学校支援を積極的に進めよう

～学校の横糸となり、地域と紡ぐＰＴＡ活動～

H30.10.19

田原市立亀山小学校ＰＴＡ

１　学区及び学校の概要

本校は、田原市の最西端にあり、伊勢湾に向け良質な農地が広がる田園地帯の中に位置している。全校児童は、わずか５８人。田原市内で一番小さな小学校である。学校の特徴としては、古くから地域に伝わる「養蚕から絹糸を紡ぐ」学習や地域の特産品の「キャベツ」を教材とした学習などの「ふるさと学習」を大切に継続してことがあげられる。また、小規模校ゆえ、みな兄弟のように仲がよく、芝生の美しい運動場では、毎日異学年での遊びが自然と繰り広げられていることも特徴の一つである。

２　研究のねらい

小規模校のよさは数多くあるものの児童数減少から派生する固定化された人間関係や体験不足は否めない。また、小規模校ゆえ、学校職員の数も少なく、学校行事を始め、さまざまな教育活動を円滑に運営することに支障を来していることも事実である。

そこで、これらの問題を克服するために、「学校・家庭・地域の願いをつなぐＰＴＡ支援のあり方を探る」ことをねらいとし、積極的な学校支援の研究に取り組んだ。

３　研究の方法

ねらい達成の方法として、**「学習支援」「地域交流支援」「環境整備支援」**の３本をＰＴＡ活動の柱とし、学校支援を積極的に進めていくことにした。学校教育活動を縦糸とするならばＰＴＡ活動が横糸となり、地域と家庭を紡ぎ、学校とともに「たくましい亀山の子」を織り成していくことを目標とした。

４　研究の実践

（１）　学習支援

ア　ふるさと学習への支援

本校には、地域の特色や小規模校のよさを生かした自慢すべき「ふるさと学習」がある。その一つが、３年生の「絹糸を紡ぐ」学習と６年生の「機織り」の学習である。学校には桑畑があり、毎年３年生は、この桑の葉をエサに、蚕を飼育して繭を作り、生糸を生産する。菓子箱に入れた蚕を休日にも家に持ち帰り、保護者も一緒になって、成長の様子を観察したり、世話をしたりする。家庭に蚕を持ち帰ることで、親子で伝統行事を学ぶきっかけとなっている。

６年生は、復刻した４台の機織り機の使い方を、地域のお年寄りに教えてもらいながら布を織り、卒業制作に取り組む。昨年度は地域の養蚕と伊勢神宮との関連を調べ、これをパンフレットにまとめ、「渥美半島菜の花まつり」で、観光客へＰＲする活動へと発展させた。この取り組みに保護者が積極的に参加した。そして、毎年夏に開催される地域の夏祭りには、ＰＴＡ役員で機織り機を会場へ運搬し、地域の人たちへ向けた「ふるさと学習」の啓発活動に協力している。

また、学校近くの「うしのけ山」では、毎年、冬になると落ち葉スキーを開催する。そのスキー場開設のための「ごかき」（クロマツの落ち葉）をＰＴＡ役員で行っている。この落ち葉スキーは、全校児童が楽しむが、特に低学年の生活科の授業では、冬の遊びとして大変喜ばれている。

イ　勤労体験・栽培活動支援「汗の広場」

毎年、生活環境部を中心に学校農園「汗の広場」にサツマイモ・キャベツの栽培を行っている。できたサツマイモは、交通安全キャンペーンの行事でドライバーに安全運転を呼びかけながら配布している。

また、キャベツは勤労生産体験だけでなく、社会科の農業の学習でも生かされている。植え付けや消毒等の世話活動の支援だけに留まらず、時には授業の中でのゲストティーチャーの役目も果たしている。昨年度は、３年生の社会科「日本一のキャベツを作ろう」の学習において、追肥、薬品散布のタイミングなど、子どもたちの疑問について、解決の糸口となるようＰＴＡ会長が授業に参加した。また、児童とともに収穫したキャベツの収益金は、教育振興費として教育活動に役立てていただいている。

ウ　読書活動支援

学校では、子どもたちにさまざまな形で読書活動の推進を図っている。そこで、ＰＴＡ委員も「読み聞かせ」を通して、この活動の支援をしてきた。

どの本にしようか本の選定には迷ったが、学校司書からのアドバイスや研修会を受け、当日は子どもたちと読書を通して、ふれあいの一時を楽しむことができた。

（２）　地域交流支援

ア　校区運動会の支援

亀山地区は、地域コミュニティの活動に子どもたちの参加は不可欠だ。そこで、ＰＴＡ役員が学校教育と地域コミュニティとの橋渡しの担い手となる働きをしている。

その一つが「校区大運動会」だ。親子はもちろん、祖父母や地域コミュニティの役員が積極的に参加し、運動会を盛り上げる。地域の人が心一つにして手を繋ぐ「亀山のわ」では、美しい芝生の運動場に地域の和が広がる。その準備を支えたり、企画に携わったりしている。

さらに３０年度は、地域のスポーツの祭典となるよう、プログラム編成の段階から企画に加わった。午前中は、競技・発表を中心に、そして、午後は地域の人々とのふれ合いを中心としたゲームにプログラムを変更し、裏舞台を地区のスポーツ推進委員とともにＰＴＡ役員が担った。最後は、「もちなげ」を行い、校区民一体となって運動会を楽しんだ。

イ　祖父母学級餅つき大会

今では、家庭では珍しくなった杵と臼を使った餅つきを学校と地域コミュニティの福祉安全部がタイアップして行う。地域の青少年健全育成部にはＰＴＡ役員が配置され、会の準備段階を支援する。この行事は世代間の交流促進に一役買っており、子どもたちにとって、非常に貴重な体験となっている。当日は、祖父母のみなさんの熟練の技のもと、おいしいお餅ができあがり、子どもたちと共に舌鼓をうち、ほのぼのとした空気が漂う。

ウ　親子ふれ合いボランティア活動（西の浜クリーンアップ活動）

３０年度は、従来学校と PTA で行ってきた海岸清掃を地区コミュニティの美化活動と一体化し、校区あげての海岸清掃活動に発展させた。本校近くの海が国定公園であるため、それを「海の日」に実施することで、地域の美化活動とともに、田原市が観光地であることの認識を高めることもねらいとした。澄んだ夏の青空のもと、コミュニティ会長、児童会長の話で始まり、一斉に美化活動に取り組むと、たくさんのゴミが一気に収集される。地域の行事と一体化することは、作業がはかどるだけでなく、同じ空気の中で達成感を味わうことができ、地域への愛着が同時に生まれることをこの時感じた。この事業の記念として、児童がデザインした看板の元画を発表し、ここに看板を立てることを約束した。

（３）　環境整備支援

児童数及び職員数が減少して、一番困ることは環境整備に手が回らないという実態が発生してしまうことだ。子どもたちの情感を育てるには、安全で美しい環境作りは必須だ。そこで、積極的に校内の環境整備作業を行ってきた。

まずは、ＰＴＡ役員と職員、児童と合同で行う春の環境整備である。農家が多いため、大型の機械をそれぞれ役員が持ち寄り、樹木の剪定に取り組んだ。落ちた枝葉は、子どもたちが拾い集

め、トラックに積み込む。少ない人数だが、大人と子どもが力を合わせれば、１時間程度で校庭の樹木がすっきりと整備される。

続いて、校区上げての運動会の準備として、全会員で行う夏の環境整備作業。これには、歴代ＰＴＡ会長の会（校友会）も積極的に参加してくださる。「年の功」というか、その手慣れた機械の扱いには感服する。

最後に、ＰＴＡ役員の記念事業として、美しい芝生を維持するための目土入れを２月の半ばに行う。春になって、芝生の美しい運動場で、子どもたちが汗だくになって遊ぶ姿を夢見ながら、みんなで最後の奉仕作業として行っている。

５　研究の考察

このように、「学習支援」「地域交流支援」「環境整備支援」の３本を柱に取り組んできた研究であるが、その成果及び課題として、次のようなことが上げられる。

〈成果①〉

地域コミュニティと学校行事を一体化していく工夫をしたことで、さまざまな世代の人とのつながりが生まれ、温かな人間関係の構築につながった。また、地域の人たちと同じ活動をすることで、子どもたちに充実感や達成感が生まれ、地域への愛着も深まった。

子どもたちにとって、温かい人間関係があることは、安心感につながり、また、充実感や達成感は次への意欲につながる。亀山小の子は「学校が好き」という子がとても多く、出席率もすごく高い。これは、心も体も健康でたくましくなくてはできないことである。本研究の成果が表れていると考える。

〈成果②〉

授業及び環境整備などの支援を通して、子どもたちと一緒に学習したり作業したりすることで、学校教育の目指すところが理解できたり子どもたちの成長を肌で感じたりすることができた。

仕事の都合をつけてＰＴＡ活動に参加することは、大変なこともあるが、子どもたちと一緒に作業したり学習したりしたあと、「ありがとうございました」と子どもたちから言われると「やってよかった」という思いがこみ上げてくる。

〈課題〉

今後さらに児童数・ＰＴＡ会員数が減少していくことを考えると、ＰＴＡ活動の多忙化が、課題となってくる。今後、学校とコミュニティとの連携を密にして、さらに行事の統合・精選を行うことが必要である。

あと４年もすれば、児童数４０人になる現状を踏まえると、「資源回収」「運動会」などはさらなる工夫が必要になってくることは必然である。この研究の取り組みを土台にして、今からその準備に取りかかっていきたいと思う。

以上のように、市内一小さな学校でも、ＰＴＡと地域コミュニティが横糸となり、学校の教育活動を支えていけば、やがては大きな大きな布地となり、丈夫で広い心をもった子どもたちに育つと信じている。

今後も、学校支援をＰＴＡが継続して行い、「たくましい亀山の子」の育成に学校とともに励んでいきたいと思う。